「働き方」と「生き方」を問う

平成日本若者論史Special3

＜若者＞をめぐる言説の現在と計量分析

後藤和智 事務所 OffLine

「働き方」と「生き方」を問う

〈若者〉をめぐる言説の現在と計量分析

平成日本若者論史 Special3

文：後藤和智（後藤和智事務所 OffLine）
表紙：川泉ポメ（Penny Lane）
発行日：2016 年 5 月 1 日（第 22 回文学フリマ東京）

本書は、下記の同人誌をまとめた総集編です。
『「働き方」を変えれば幸せになれる？――平成日本若者論史 7』
『「ヤンキー」論の奇妙な位相――平成日本若者論史 9』
『「新しい生き方」は誰のため？：統計学から見た若者論・若者向け自己啓発言説の現在――平成日本若者論史 12』
その他、過去のサークルペーパーの一部を収録しております。

総集編版まえがき

55冊目の同人誌となります、後藤和智です。そして本書は、２０１０年に刊行した『市民のための〈基礎から学ぶ〉統計学』（後藤和智事務所ＯｆｆＬｉｎｅ、２０１０年（サンシャインクリエイション49））以来の総集編となります（なお２０１６年5月中にもう1冊総集編を出す予定です）。本書は、コピー誌として出していた「平成日本若者論史」シリーズから、『「働き方」を変えれば幸せになれる？――平成日本若者論史7』（２０１３年、サンシャインクリエイション60）、『「ヤンキー」論の奇妙な位相――平成日本若者論史９』（２０１４年、仙台コミケ２１６）、『「新しい生き方」は誰のため？：統計学から見た若者論・若者向け自己啓発言説の現在――平成日本若者論史12』（２０１４年、コミティア１１０）の3冊をまとめ、新たな1冊の同人誌として改めて刊行するものです。特に『「働き方」を変えれば幸せになれる？』は、ＡｍａｚｏｎのＫｉｎｄｌｅのビジネス書ランキングで1位を獲得したことから知っている方も多いかと思われます。

なぜこの3冊をまとめたのかというと、この3冊に共通して流れているテーマが、今の「若手論客」、もう少し言うと若者論ないし若い世代向けの社会評論がどのような位相を持っているのかというものだからです。２０１０年代に入り、若い世代をめぐる言説は、それまでのバッシング基調のものから、若い世代の「可能性」を喧伝するようなものに（かなり短い間に）変容しました。読者の皆様から見れば、「若者バッシングが減ってよかったのではないのか」と思う人も少なくないかもしれません。

しかし、私は現在の状況こそ、バッシングが猖獗を極めていた時期よりも危険なのではないかと思うのです。第一に、それらの若者擁護論のなかで展開される「若者」イメージは、バッシングが基調であった時代のイメージを多く引きずっていることです。その根底にあるのは、今の若い世代は上の世代とは明らかに違った心性を持っているというものです。１９９０年代終わり～２０００年代は、そのような認識が劣化言説、若者バッシングの原動力となっていました。それが２０１０年代になって、いきなり若者擁護論の原動力になっているのを見ると、根底としては何も変わっていないのではないかと考えざるを得ません。

第二に、バッシング基調の時代と変わらず、現在の若者論はデータや公共政策、リベラリズムの視点を著しく欠いているということです。若い世代の「特殊性」を礼讃する議論は、若い世代の「新しさ」に任せればあらゆる「古い」問題が解決するという視点に立っているような気がしてなりません。それは、２０１０年代になってたびたび見られ、そして簡単に消えていったような、若い世代による「政策提言」や「政治運動」によく見られます。

例えば、２０１４年の東京都知事選挙において、舛添要一（当選）や宇都宮健児などといった主要候補の傍ら、起業家の家入一真が政治団体「インターネッ党」を掲げて立候補しました。そして、家入は若い世代の「代表」として振る舞ったほか、（一応私も寄稿している）政治系オピニオンサイト「ポリタス」などにおいては、家入を支持する「若手」論客が少なくない数で見られました。家入は都知事選で落選しますが、「インターネッ党」はその後も２０２０年までに東京都の全ての区長選で候補者を擁立することを宣言していました……が、結局候補者を擁立せず、なんと２０１４年の時点で事実上活動を休止しております（詳しくは、http://www.huffingtonpost.jp/2014/06/08/internet-party-straying_n_5468758.html を参照されたい）。

今の若者論をめぐる状況は、若い世代の「特殊性」や「可能性」を切り売りするという状況と言うことができるかもしれません。政治・社会運動系からマーケティング系に至るまで、論拠に乏しい若い世代の「可能性」や「特殊性」を喧伝し、自らの言論の先進性を強調する、というのが現在の若者論の状況であると考えます。しかしそれは、自分の自意識のために「若者」イメージを濫用

4

するというものであり、社会という観点が抜けております。そのような動向を批判的に捉えるためにこそ、いまこれらの論考を改めて世に問う必要があると考えます。

２００６年に刊行された『「ニート」って言うな！』（共著、光文社新書、２００６年）から２０１３年の『あいつらは自分たちとは違う」という病――不毛な「世代論」からの脱却』（日本図書センター、２０１３年）に至るまでの私の仕事、そして「平成日本若者論史」シリーズのいくつかは、主に１９９０年代～２０００年代の若者論について中心的に採り上げたものです。しかし本書は、主に２０１０年代の若者論を中心に採り上げています。２０１０年代の若者論について、総括するのはまだ早い、と思われる方もいらっしゃるかもしれませんが（２０００年代の若者論すらろくに総括が行われていない現状においては特に）、２０１０年代という「ポスト劣化言説の時代」を見通すためには必要な作業だと考えております。

本書の表紙イラストは、サークル「Ｐｅｎｎｙ Ｌａｎｅ」の川泉ポメ氏に担当していただきました。氏は主に「アイドルマスター」などのジャンルで活躍されていますが、私が氏の同人誌を知ったのは、２０１３年に刊行された『イベントを主宰したら脅迫が来て警察沙汰になりました。』（Ｐｅｎｎｙ Ｌａｎｅ、２０１３年（コミックマーケット85））でした。全国の同人誌即売会を評論している評論サークルの方がこの同人誌についてツイートしていたのをきっかけに、同書を読んで、感想をツイートしたのが氏との交流のきっかけでした。同書が刊行された２０１３年は、２０１２年に『黒子のバスケ』関連のイベントや同人誌即売会に対して行われた脅迫をきっかけに、同ジャンルのみならず東方Ｐｒｏｊｅｃｔなどといった様々なジャンルの即売会が脅迫によって中止に追い込まれた時期でもあります。

読者の皆様の中には、若者論なんて取るに足らないものだ、あるいはそんなものはただの世代間のコミュニケーションの齟齬に過ぎない、と考えている方も少なからずいらっしゃるかと思われます。しかし、私の見立てでは、若者論というものは、社会の欲望をもっとも残酷な、赤裸々な形で表出してしまうものです。「若者」については多くの研究、論評がなされてきましたが、「若者論」についてはそれらが足りていないと言わざるを得ないでしょう。アカデミズムの外で若者論の蒐集、研究（？）をしてきた身としては、そういったアカデミズムの現状に対して不満がないわけではないのですが、それは抑えつつ、若者論へのより多くの関心が向けられるように、精進していきたいと思っております。

目次

総集編版まえがき　4

第1部「働き方」を変えれば幸せになれる？……9

第1章 まえがき 兼 本書の問題意識　10

第2章「海外に出よ」系の言説を読む——田村耕太郎と谷本真由美を中心に　11

2．1 はじめに　11
2．2「グローバル」を演出するための「アイドル」　11
2．3「ブラック企業」の経営者はなぜ若者論を語るのか　14
2．4 まとめ——ニヒリズムの帝国　16

第3章「降りる生き方」の罠——「新しい時代の正義」の何が危ういのか　17

3．1 はじめに　17
3．2 現代の「降りる」生き方の流れ　17
3．3 現代の若者論との関係性　19
3．4 まとめ——グローバル化と「降りる」生き方の間で　20

第4章 若者の「新しい幸せ」の虚妄——古市憲寿試論　22

4．1 はじめに　22
4．2「豊かさの中の欠乏」から「欠乏の中の豊かさ」、あるいは「リアル」から「ニヒル」　22
4．3 現代の若者論の「完成形」としての古市憲寿　23
4．4 まとめ——中間の喪失　24

第5章 まとめ——デフレ時代のカーニバル　26

5．1「僕たち」とは誰か　26
5．2 まずはマクロ経済の重要性を認識せよ　26

第6章「U—25サバイバルマニュアル」が描く「新・仕事人間」——その病理と時代背景　28

6．1 ラインナップと著者　28
6．2 社会を変えるな、自分を変えろ？　29
6．3 若者論壇・政府・財界合作の「新・仕事人間」　31

第2部「新しい生き方」は誰のため？統計学から見た若者論・若者向け自己啓発言説の現在……35

第7章 はじめに　36

第8章 個別論者の分析　39

8．1 はじめに　39
8．2 古市憲寿　40
8．3 イケダハヤト　43
8．4 ちきりん　46
8．5 谷本真由美　48

第9章 横断的な分析　54

9．1 はじめに　54
9．2「働き方」関係書籍の分析　54
9．3「生き方」関係書籍の分析　56

9．4 分析対象書籍全体の横断的な分析 58

第3部「ヤンキー」論の奇妙な位相……63

第10章 はじめに 64

第11章「ヤンキー」論の布置 67

11．1 はじめに 67
11．2 現在の「ヤンキー」論への批判 69
11．3 現在の「ヤンキー」論の形成と差別の再生産 72
11．4 内向きの論理 74
11．5 おわりに――「批評」の病理をどう見るか 77

第12章 統計学で解き明かす「ヤンキー」論 78

12．1 はじめに 78
12．3「ヤンキー」論4冊の個別検証 84
12．3．1 斎藤環『世界が土曜の夜の夢なら』 84
12．3．2 斎藤環『ヤンキー化する日本』 84
12．3．3 原田曜平『ヤンキー経済』 86
12．3．4 速水健朗『ケータイ小説的。』 88
12．4「ヤンキー」論4冊全体の検証 89
12．5 対応分析による9冊の特徴の分析 90

第4部 サークルペーパーより……97

第13章 東浩紀と「批評」市場の問題 98

第14章 君にもなれる！「グローバル」論客 102

第15章 古市憲寿は「艦これ」の提督になったらどうだろか？ 105

第16章「若者の右傾化」論と現代若者論の位相 108

第17章「悪意」を生み出すものは何か：森達也『クラウド増殖する悪意』を批判する 111

第18章 オタク論者やマーケティング論者に社会を語らせてはいけないこれだけの理由 114

第19章「夢ビジョン2020」を批判する：その危険な思想と成立 117

第１部
「働き方」を変えれば幸せになれる？

第1章 まえがき 兼 本書の問題意識

31冊目の同人誌となります、後藤和智です。今回のテーマは「（若者の）働き方」です。

現在、若年層の「働き方」について語られる言説と言いますと、現代の言説は3つに分かれると思います。ひとつは、学者で言うなら中西新太郎や乾彰夫、実務家で言うなら今野晴貴や藤田孝典に代表されるような、若年層の置かれた状況を統計などで客観的に捉えたり、あるいは自らの相談事例などを分析したりして、若年層の置かれている労働環境を明らかにし、そしてそこからいかにして改善につなげていくかというもの。しかし本書ではこの分野を表立って取り扱うことはしません（言及することはあります）。

本書で取り扱うのは、残りの2つです。第二の言説は、若年層に対して、日本という枠組みに捉えられていると批判（ないし鼓舞）し、積極的に「海外に出る」ことを推奨するもの。近年になって、大前研一などの自己啓発系の言説の発信者はもとより、コラムニストや海外在住のビジネスマン、さらには学生や起業家などによって、若年層に対してこのような言説が発せられているのです。実際、書店のビジネス書の棚や、さらにはKindleの電子書籍売り場に至るまで、このような「海外に出よ」系の論説があふれかえっています。

そして第三の言説は、先に見たような、若年層に「海外に出よ」と訴えかける言説を尻目に、自分たちは経済という枠組みから自由になった世代として、静かに滅び行く日本の中で「生きのびて」いくべきだとする言説です。このような言説でのし上がった論客として、古市憲寿が挙げられるでしょう。そのほかにも、若年層向け自己啓発書にも、このような認識に基づいた起業言説が見られるようになり、また三浦展のような若年層の「消費」に詳しい論客からも、若年層の「新しい特性」を持ち上げるような言説が出てくるようになってきました。

そして第二、第三の言説の共通点として挙げられるのが、これらは2010年代に入って、ある種の若者擁護論として語られるようになったということです。1990年代終わり頃から2000年代の若年層バッシングの時代を経由し、2000年代の終わり頃には、若年層の「新しい特性」に「希望」や、あるいは現代の新しい「幸福」を見出そうとする言説が発信されるようになりました。そして2000年代半ば頃～終わり頃の（若者による）若者論を席巻していたロスジェネ的な言説――自らの「苦境」や、自分たちの世代が他の世代に比べて「割を食った」世代であることを強調すること――に取って代わって、2010年代には若い世代が自らの「特殊性」を「ポジティブ」に捉え、将来の日本に対しての「希望」を提示するものが台頭するようになりました。

このような若者擁護論の流行は何に起因するのでしょうか。私が考えている仮説は、2000年代に若年層バッシングと、それへの「反論」としてのロスジェネ言説という構図が一巡し、陳腐化したことです。1990年代終わり頃から2000年代にかけて、若年層の「劣化」や「問題」が――実態とはかなりかけ離れた形で――喧伝されました。そのような言説が流行する中で、若年層の「特殊性」が強調されるようになり、現代の若年層は最早今までの大人たちには「理解」が不可能なのだという認識が定着するようになりました。

2000年代には、2002年頃と、2006年頃を中心に、このような若年層バッシングに対する、科学的、倫理的視点からの「反論」が試みられました。しかしこれらの「反論」は、若年層の「特殊性」を強調する若者擁護論によって無力化されていきました。特に2000年代半ば頃から多く見られるようになった「非モテ」「ロスジェネ」系統の言説は、自分たちが上の世代においては「当たり前」とされていたものを「失わせられた」ことを強調するあまり、かえって若者バッシングと協調して下の世代を世代的アイデンティティの面で切り離すことを強化してしまった、と見ることができます。

そして若年層バッシング言説と若者擁護論の「協調」によって、ロスジェネ

第1部 「働き方」を変えれば幸せになれる？

より若い世代の「特殊性」が強調されるようになると、バッシングを「検証」するのはやめよう、若者論によって提示された「特殊性」を前提にして議論しよう、という気風が生まれた――そのような流れが、2010年代の「（若者の）働き方」言説の背景になっているのではないでしょうか。

もちろん他の理由も考えられます。例えば東日本大震災を契機とする「希望」言説の流行や、あるいはデフレの継続から経済成長への「諦め」が生まれたことなども考えられるでしょう。本書はこれらの可能性にも言及しつつ、「（若者の）働き方」言説から、2010年代初頭の若者論の立ち位置、そしてその病理について検討していく、というのがコンセプトです。

若年層の「特殊性」を前提とした若者擁護論の流行が、かえって若年層の可能性を狭めているのではないか。このような現代の若者擁護論への懐疑は、もっと出されるべきではないかと思います。若者を擁護しているのだからそれでいいのではないか、起業とかをするような「ポジティブ」「アクティブ」な若い人たちを批判するな、という考え方は、かえって現代の若者論がどのような思想に基づき、またどのような問題点を抱えているかということを見過ごすものにしかなり得ないのではないでしょうか。

なお、本書では、おまけとして、2013年1月5日にニコニコチャンネル（ブロマガ）で配信した論考「U-25サバイバルマニュアル」が描く「新・仕事人間」――その病理と時代背景」を収録しております。ディスカヴァー21が発行している、若い世代による若い世代のための自己啓発書シリーズ「U-25サバイバルマニュアル」もまた、テーマが「（若者の）働き方」であり、かつここまで見たような若者擁護論となっているからです。

第2章「海外に出よ」系の言説を読む――田村耕太郎と谷本真由美を中心に

２．１ はじめに

「若者は海外に出よ」あるいは「海外に出てみて変わった」という書籍（電子書籍含む）の刊行が盛んだ。経済のグローバル化、フラット化などは以前から語られていたのだが、２０１０年代に入って、「若者は海外に出るべきだ」とする主張が一気に爆発した感がある。また若い世代の書き手においても、特に電子書籍において、「落ちこぼれだった自分が海外に出ていろいろな人と出会うことによって変わった（だから同世代の若者も海外に出るべきだ）」というものが多く出るようになっている。

若年層向けの自己啓発書やビジネス書において、「海外に出ること」というものが若年層の、そして社会の「閉塞感」を解決するための決定的な「処方箋」として提供されるという傾向が、現在になって現れてきている。本章では、それらがどのような構造を持ち、またどのような問題点があるのかということを明らかにしていきたい。

２．２「グローバル」を演出するための「アイドル」

ツイッターをやっている人なら、「メイロマ」（@May_Roma）という名前に聞き覚えがあるかもしれない。「メイロマ」こと、イギリス在住の情報通信コンサルティング業務従事者である谷本真由美だ。谷本はツイッターをはじめ、近年ではニュースサイトや書籍などで積極的に日本の社会や働き方を批判して

11

いる。

谷本の手法としては、「日本」がいかに（谷本の語るところの）国際的な常識から離れており、また谷本の言説を受容するような層にとって抑圧となっているかを語ることが挙げられる。特に彼女のツイッターやインターネットのニュースサイトでの発言は、「日本的」なものを悪し様に罵っているとしか思えないものも目立つ。例えば、所謂「エクセル方眼紙」（エクセルのセルの高さと幅をそろえて方眼紙状にして使うこと）について、それは日本だけの「文化」であるとした文章では、次のような発言が飛び出す。

> しかしですね、こういう無駄な努力、というか、斜め上の努力は、時間と電気代と労力の無駄なだけではなく、ビジネスリスクなわけです。現在グローバル化、グローバル化と叫びまくっている方が日本にはおられますが、海外と文書をやり取りする時にエクセル方眼紙を送ってしまう大タワケ様がおられます。
>
> 職人技が発揮されたエクセル方眼紙を受け取ったガイジンさん達は以下の様にシャウトなされます。真のメタルの布教に日夜邁進するマノウオー先生よりも強力なシャウトです。
>
> 「オー！！！！ファック！！！ナンゾこれ！？！意味不明。サイズが変えられねえ！！ぎゃあ、プリンタで印刷したらサイズがずれた。しかも変な数式が入ってる！！ただの文書だろおい。ファックファックファック。師ね師ね師ね師ね！！！！」
>
> 師ね師ね団も真っ青なシャウトですね。
>
> この様に怒ったガイジンさんは「ジャパニーズのあの野郎はクレイジーなディックヘッドだぜ。本当にディックヘッドだ。俺、もうあいつらの仕事には協力しない。だってこっちのことを全然考えてないよな。最低だぜ」とパブで同僚に悪態をつきます。（谷本真由美［２０１３ｂ］）

このような「罵倒」とも言える文章が「芸」として成立しているのは谷本のなせる業、と言うほかない。谷本のこのような「キャラ」が、なぜ許容されるのだろうか。

書籍（電子書籍含む）にしても、この文章ほどではないものの、何かにつけて「海外」や「グローバル」を持ち出して日本の「閉塞感」をアピールする。そもそも谷本の『日本が世界一「貧しい」国である件について』（祥伝社、２０１３年）には、谷本による《自分が日本でかかっていた洗脳。競争しなくてはいけない、家族や友より仕事、進歩は偉い、田舎はださい、自販機とコンビニは重要、電車とバスは定時でなければいけない、痩せてなければいけない、群れなければいけない、流行は追わないといけない。どれも自分を不幸にしていた》（谷本真由美［２０１３ａ］「はじめに」）というツイートが引用されている。そして海外に出ることでその「洗脳」から解けた、というのが谷本のストーリーとして見受けられる。

このような谷本のストーリーは、必然的に世の中の問題を自意識の問題として考えるセラピー文化的な文脈に結びつく。谷本は同書の最初のほうで《いつまでたっても残業が減らず、労働環境や住環境が悪化する一方なのは、つまり、「自分の責任」なんです》（谷本前掲第1章）という物言いはその象徴である。谷本の言うように、言論の自由が保障され、また経済的に豊かであり、インターネットも充実している…などといった《自分で考えたり行動するための「道具」や「材料」は十分すぎるほどそろっている》（谷本前掲第1章）社会が「貧しい」のは日本人の意識のあり方に問題がある、というのが谷本の主張の根幹となっている。第3章にも《何でも人任せで、自分で責任を取りたくないのです。無責任でずるくて、怠け者の人が多いのです。日本人が勤勉で責任感があるというのは大嘘だと思います。自分で考えることも、行動することも、リスクを負うことも嫌な人たちが多いのです》（谷本前掲第3章）という、根拠の乏しい批判が見られるのも、このようなある種の「自己責任」論に基づくセラピー的な社会観の発露として捉えられるべきだろう。

外国に住んでいるから、あるいは外国人だから日本の問題点がわかる、というのは日本人論によく見られる「論拠」であり、かつては自らの主張を通すためにイザヤ・ベンダサンなる虚偽のユダヤ人をでっち上げた山本七平の『日本人とユダヤ人』などといった例も存在する。ただ谷本の主張として特徴的なのは、谷本の「日本人論」がある種の自己啓発としての役割を持っていることだろう（そもそも谷本は近年の自己啓発書の傾向について「自分は悪くない、社会が悪い」というものばかりだと言っているが（谷本前掲第３章）、牧野智和や漆原直行などが明らかにしているとおり、現状は真逆である。詳しくは牧野智和［２０１２ａ］、漆原直行［２０１２］及び後藤和智［２０１３ｅ］、関連書としては小池靖［２００７］を参照されたい）。

谷本が提供していることは、受け手に対して自らの視点を「グローバル」と同一化させることにより、日本を（具体的な社会やシステムの問題点をすっ飛ばして）本質的に劣化しているという「錯覚」と言うことができる。そして谷本の言説とは、自分の意識を「グローバル」ないし「欧米」の考え方に合わせることによって「日本」という枠組みを脱却して、真の幸せを手に入れることができるというものなのだ。

海外の動向を称揚する論者として谷本に並んで挙げられるのは、かつて参議院議員も務め現在はコラムニストとして活躍する田村耕太郎であろう。田村は、日本へのネガティブキャンペーンを基本とする谷本とは対照的に、いわば「ポジティブ」と「パッション」で押すタイプと言える。田村の代表的な著書として『君は、こんなワクワクする世界を見ずに死ねるか！?』や『君は、世界を迎え撃つ準備ができているか?』（中経出版、２０１２年）などといった具合に、タイトルからして読者である「君」に対して熱く呼びかけるというパターンとなっていることがわかる。

とはいえ田村の主張する「世界で生き抜く方法」のようなものは谷本とは基本的には変わらない。『君は、世界を～』において強調されているものとして、教養や科学の知識をつける、英語を学ぶといったものが挙げられ、これらの最終的最終的な目標は「ポジティブ」になるということである。ひたすら「ポジティブ」であれ、そしてその「ポジティブ」を持ってして世界に攻め込んでいけ、というのが田村の主張の根幹である。また田村の言説にも、我が国がいかに「閉鎖的」であるかを強調するものも見られる。

ただ、田村の言説の特徴としては、早く世界に出てこの動きに乗らなければならないと「焦らせる」ことが挙げられるだろう。田村は自らが見聞きした、世界のエリートの事情や、あるいは海外で活躍する日本人の「実態」をしきりに強調する。田村にとって「世界を迎え撃つ」とは基本的にエリート層における戦いであり、日本の東京大学や慶應義塾などといった大学では最早通用しない、もっと上位の大学に留学せよとしきりに「焦らせる」。グローバルな社会環境下では、日本人は世界のエリートとフラットな競争をしなければならない。《今の日本国内の教育インフラでは、世界で戦える人材を育成することはできない。日本の受験競争をいかに勝ち抜いても、残念ながら世界では高い評価を受けることはできない。日本の教育システムの中にいては、いつまで経ってもグローバル人材にはなれないのだ》（田村耕太郎［２０１２］第１章）とまで断言するほどだ。

ここまで谷本と田村の言説について軽く触れてきた。谷本にしても田村にしても、基本的なスタンスは、日本が世界の標準的な考え方やシステムに比べていかに「劣って」いる、あるいは「遅れて」おり、特にエリート層にとって抑圧にしかなっていないかを強調するものである（ただ谷本は「日本」を貶めるためなら通常の論客ならためらうような罵詈雑言も辞さないのに対し、田村はひたすら「ポジティブ」で押し通そうとする）。言説の傾向としては大筋で共通している。このような論客の役割は何かと言うと、おそらく「グローバル化」という時代を煽るための「アイドル」（偶像）と推測される。

この２者の言動からは、このような「アイドル」に必要なのは、日本の現状に対するニヒリスティックな態度と言うことができる。谷本にしても田村にしても、日本の社会のシステムのいいところを生かしたり、あるいは地道に問題

13

点を解決していこうとするスタンスは見受けられない。一足飛びに「グローバル」な、あるいは「世界を迎え撃つ」ための考え方を導入して、グローバル化時代の中でいかに「自分」（言説の受け手）が生きていくかということばかりが協調されるのである。そしてこのような態度のもとでは、日本の現状に対しては冷笑的にならざるを得ないのが常だろう。

田村や谷本に見られるようなニヒリスティックな世界観、経済観は、「グローバル化」を強調する論客において普遍的に見られる。例として大石哲之の『ノマド化する時代』（ディスカヴァー・トゥエンティワン、２０１３年）や、松井博の『企業が「帝国」化する』（アスキー新書、２０１２年）が挙げられよう。

大石は「ノマド研究所」を主催して現代における働き方などを研究しているコミュニティを運営しているという。大石は現代に対して、《国というものの意義が薄れ、人は自由に国境を行き来するようになっていく。（略）／一方で、世界中に展開する資本主義の主役は国ではなく、ゴールドマン・サックスや、アップル、グーグルのような私企業だ》（大石哲之［２０１３］ブロローグ）という時代であると規定し、さらにグローバル化や国家の終焉によって多くの人々が「ハイパーノマド」（＝グローバルエリート）と「下層ノマド」に分かれていくと主張する。そしてそのような競争から降りた存在として「起業家ノマド」までもが挙げられる。同書の締めの第７章では「ノマド化する時代を生きるためのヒント」なるものが書かれているが、やはりそれも谷本や田村などとほとんど変わらない。アメリカのアップル本社のシニアマネージャーを歴任したことのある松井にしても、アップルやグーグル、マクドナルドといった主要企業の「帝国」化を示し、最早資本主義を支配するのは国家ではなく私企業なのだとしつつも、示すのは「どう生きるか」ということに過ぎず、グローバル化をある種の宿命論として捉えている。

現代のグローバル化言説は、グローバルという流れは最早変えることはできないし、そのような環境下で二極化が進むのも不可避である、むしろそれに「適用」するように自分を変えるべきだ、という宿命論に陥っていることがわかるはずだ。そしてそれは社会や企業の動きは変えることができないというニヒリズムに基づくものである。

２．３「ブラック企業」の経営者はなぜ若者論を語るのか

谷村や田村などによって演出される「グローバルな気分」の扇動を軌を一にしている言説として、所謂「ブラック企業」とされる起業の経営者による若者論を採り上げることができる。

「ブラック企業」とは、２０００年代半ば頃よりインターネット上で使われているネットスラングのひとつであり、違法なことをしている企業はもとより、たとい合法であっても残業代を支払わない、過剰な競争と選別で多くの人が精神を病んで辞めてしまう、などといった問題を抱えている企業に対して使われることが多い。

その「ブラック企業」と呼ばれる企業の代表的なものとして、ワタミや「ユニクロ」のファーストリテイリングが挙げられる。ワタミについては過去に従業員の過労死をめぐって幾度となく問題が起こっていたり、ファーストリテイリングにしても過剰な選別による離職が論じられることも少なくない。

しかし、ワタミ会長の渡邉美樹と、ファーストリテイリング社長兼会長の柳井正は、ビジネス系のメディアでオピニオンリーダーとして発言している。そしてその発言内容には、若者論も少なくない。実を言うと、渡邉や柳井のような経営者が、自らの企業が大きな問題を起こしているにもかかわらず、ビジネス系のメディアで若者論の論客として発言できるのには、前節で採り上げた田村や谷本などを重用するようなメディア環境も大きく関わっていると推測されるのである。彼らもまた、「グローバル化」での「新しい働き方」「新しい生き方」を煽る「アイドル」なのである。

例えば柳井は、ネット上を中心に批判を読んだ朝日新聞のインタビュー［「年

収１００万円も仕方ない」ユニクロ柳井会長に聞く」（http://www.asahi.com/business/update/0423/TKY201304220465.html）において、柳井は「成長か死か」という価値観を提示している。柳井は自らが社長・会長を務めるファーストリテイリングについて「世界同一賃金」を導入することについて、自社の離職率が高いことについて《それはグローバル化の問題だ。１０年前から社員にもいってきた。将来は、年収１億円か１００万円に分かれて、中間層が減っていく。仕事を通じて付加価値がつけられないと、低賃金で働く途上国の人の賃金にフラット化するので、年収１００万円のほうになっていくのは仕方がない》ということを述べている。さらに柳井は《グローバル経済というのは『Ｇｒｏｗ　ｏｒ　Ｄｉｅ（グロウ・オア・ダイ）』（成長か、さもなければ死か）。非常にエキサイティングな時代だ。変わらなければ死ぬ、と社員にもいっている》と言っている。

このような「グローバル化」に対する認識は、先に挙げた谷本や田村などと共通しているものである。これから世界はグローバル化して、特に若年層は高い付加価値をつけないと世界で生きていけなくなる、というのはここまで挙げてきた若年層向け自己啓発書、ビジネス書と共通の世界観である。「エキサイティング」を強調するのも同様だ。

このような言説への批判に対して、柳井はただグローバル化が進めば世界はこういうことになるという「事実」を述べているだけだ、と反論する向きもあるかもしれない。しかしそのような反論は、「グローバル化が進めばこうなるのは仕方がない」という宿命論を担保として、不当に低い賃金を正当化するものでしかない。

しかし、現代の産業は、インターネットなどの発達によってグローバル化が起こっていると言っても、特に小売業やサービス業などはローカルな住民や来訪者に対して提供されるものであり、競争相手は「世界」ではなく店舗を展開している地域に他ならない。そのようなローカルレベルでの競争や、あるいはローカルの社会・経済的環境から目をそらし、自分たちがやっていること、あるいは自分たちが若者に与えたいことは「グローバル」なことなのだ、という世界観をもってして自らへの批判をかわしているものと言える。

これが若者論とどう繋がるのか。それは、このようなグローバル化論と、そこで（特に若年層が）いかに「生きる」かということについてを語るときに、若年層の「劣化」がこのような論者における若年層への認識の基底として存在することが挙げられる。そもそも柳井は『日経ビジネス』２０１３年４月15日号において、《日本の若い人は今後、海外の若い人と競争しなければなりません。それも競争相手は先進国だけでなく、新興国の人々も含まれる。その中で、旧来型の制度を守っていては、やっていけないと思っています》（ｐ．４３）ということを語っており、現代の若年層は海外と競争しなければならないと説いている。

その際に、現代の、例えば「草食系男子」という言葉に代表されるような「甘ったれた」ものでは勝つことはできないという認識があることは、このような論客においては都合がいい。先に採り上げた谷本の「世界を知らない」という若年層に対するイメージは、この一つの変奏であると言える。「世界と渡り合わなければならない若者」だからこそ、世界を知って、自分を高めてほしいというメッセージを、若年層向け自己啓発書や一部の経営者言説が発していると言うことができる。

このような言説の、セラピーとしての側面についてもこのような劣化言説の影響を見て取ることができる。自分が「生きづらさ」や「閉塞感」を感じていたのは自分が「日本」という枠組みにとどまっていたからで、そのような枠組みを取り払えばそのような「生きづらさ」や「閉塞感」を克服できる、というのはある種の自己啓発セミナーと同様の構造を持っているということは先にも述べた通りである。このような言説に基づく認識を若い世代に植え付けるのは、若年層劣化言説の内面化にほかならない。

近年の自己啓発言説は、得てして劣化言説と親和性が高い。谷本が「イギリスでは」「欧州では」ということを繰り返すのは、彼女の言説の受け手にとっ

15

て「日本」という社会が自らの可能性を抑圧する、「世界」に比べて劣った存在であるということを意識している可能性が高い。若年層に対しても、あるいは日本社会に対しても、劣化言説とは相互不信によって広まる言説である。現代のグローバル化系の自己啓発言説は、若年層と経営者層の相互不信に基づき、価値観の空中戦を行っている、空疎なものでしかないのだ。

2．4 まとめ――ニヒリズムの帝国

若年層が「世界を知らない」ことを嘆き、「海外に出ること」を積極的に煽る自己啓発系の論客、そして「成長か死か」と述べる経営者――。これらの論客が示す価値観は、近年の若年層劣化言説、すなわち現代の若年層は社会や世界で活躍する意欲を失い、内にこもった生き方をしようとしている、しかしそのような生き方では弱肉強食のグローバル化社会を生きのびることができないという言説の上で互いに反射を繰り返して、若年層に対する道徳的な締め付けを強化するものである。

しかし忘れてはいけないのは、第一に、特に商業やサービス業については相手にしなければならないのはまずは事業を展開している地域であるということ、第二にいくら崇高な理念を掲げていても、実現性がなければ意味がないこと、第三に、それと同時に身体や精神を病んでしまってもやはり意味はないということ。

そして最後に最も強調しなければならないのは、若年層もまた国民としての権利を持った市民であるということである。若者論における保守派の伸張から、若年層が権利を主張することが忌み嫌われるようになって久しく、また柳井正などの言説にもそのような傾向が見受けられるが、少なくとも労働環境について、法律の範囲内で正当に異議を申し立てるのは国民に固有の権利として憲法で保障されているものだ。

ここで採り上げた自己啓発の書き手の中には、柳井のような言説や、あるいは「ブラック企業」を問題視する向きも存在はしている。しかし、彼らの示す「解決策」は、それこそ谷本真由美のように「日本の労働環境は〝クソ〟なのだから海外に出て自由な働き方をすればいい」というものが多い。しかしそのような「解決策」では、そもそもの国内の問題を解決することはできないし、また「変えられないなら逃げればいい」という選択肢を提示することは、「社会や制度は変えられない」というニヒリズムを強化するものでしかない。

このようなニヒリズムは、次章で採り上げる、「国内でしたたかに生きのびればいい」という言説にも通底するものである。本書で採り上げる自己啓発言説は、社会や経済、制度に対してニヒルな態度をとるという点では強い共通点がある。そのようなニヒリズムの広がりについては本書の最後で見ていくこととしつつ、今度は、本章で採り上げた言説とは逆の方向性を持つ言説について採り上げてみよう。

第３章「降りる生き方」の罠 ――「新しい時代の正義」の何が危ういのか

３．１ はじめに

前章で採り上げたのは、「グローバル化した社会というのは特に若い人たちにとって、この上なくエキサイティングな社会なんだ！」ということを煽り、そして彼らの示す「エキサイティング」な動きに乗ることによって成功を収めようとする言説であった。もちろん、彼らの社会観、経済観が極めて単純で宿命論的なものでしかなく、また彼らの主張する「エキサイティング」な動きの裏で、国内の問題が覆い隠されるのもまた問題ではあるものの、ここではその追求は措いておく。

本章で採り上げるのは、前章で採り上げた言説と対極に位置するような、日本の国内という枠組みで「したたかに」生きていこうというものだ。もちろんこれらの言説も、現代の日本社会の「閉塞感」や「生きづらさ」を問題視するという点では前章で採り上げた言説とは変わらない。また、日本の「閉塞感」などに対して、「若者の新しい考え方・想像力」を発揮することにより、ブレイクスルーを求めるという構造も同一だ。違うのはそれをいかにして実現するかというところくらいでしかない。

これらの言説として特徴的なのは、前章で採り上げたグローバル化系の言説よりも、世代間闘争としての色彩が強いことだろう。そもそも「縮小する経済の中でしたたかに生きる」系の言説は、デフレや不況が長期化する中で、上の世代のような「一つの会社に長く勤める」という生き方はもう通用しないのだ、これからは働く場所や価値観やキャリア形成、さらには経済という考え方から自由にならなければならないという主張を内包していることが多いので、世代間闘争としての性質を持ってしまうのも必然と言える。

「競争が嫌なら、競争から降りればいい」――。このような言説は、一見すると過酷な労働環境などで苦しんでいる若年層を「救済」する言葉として響くかもしれない。しかし実際には、前章で採り上げた言説と同様に、ニヒリズムの色の強い社会観に基づいていること、また彼らの示す「新しい生き方」のために必要な経済的、社会的資本という側面について何ら解答を提示していないという点では、先に挙げたグローバル化言説と変わるところはない。さらに言うと、若者擁護論の形で示されるこれらの言説もまた、１９９０年代終わり頃～２０００年代の若年層叩きの流れと不可分ではない。本章で示したいのは、若年層に対して一定の「属性」「心性」を決めつけ、それを元にして「新しい可能性」を持ち上げるという若者論の空疎さでもある。

３．２ 現代の「降りる」生き方の流れ

現代の消費社会が示すような経済至上主義の価値観が人心を荒廃させた、という言説は、最近になって突如として降ってわいたものというわけではない。例えばバブル期には、中野孝次の『清貧の思想』がベストセラーになったり、あるいは経済成長によって失われた伝統的な価値観の見直しから、新渡戸稲造の『武士道』が読まれるようになったということがあった。また作家や思想家、哲学者からも現代の経済的な価値観が日本人の感覚を失わせたとか、あるいは考えることを放棄させているという言説が発せられることもある。代表例としては、山折哲雄、鷲田清一、暉峻淑子、中島義道などが挙げられるが、このような論客の多くは比較的高齢である。

現代の「降りる生き方」系の特徴的な点は、このような現代社会批判に基づく、「経済から自由になるべき」と主張する言説が若い世代によって発せられているという点である。「降りる生き方」を説く若い世代の論客においてほと

17

んど共通しているのは、額に汗して経済成長に与してきた上の世代の生き方は、経済の停滞がほぼ確定してしまった現代においては通用しないものであり、不況による社会の崩壊を目の当たりにし（１９７０年代生まれの論客）、あるいは不況と共に育ってきた（１９８０年代以降生まれの論客）自分たちの提示する生き方こそが、これからの社会において必要になるのだというものである。

例を挙げてみよう。「ノマド・トーキョー」なる生き方を実践し、提示している米田智彦は、著書『僕らの時代のライフデザイン』（ダイヤモンド社、２０１３年）の「はじめに」において、《約二〇年も続く経済の停滞、日本企業の凋落……そこに起きた東日本大震災と福島原発の事故。日本社会が大きな時代の転換期にあることは誰もがご存じだと思います。／「これまでのようにはいかない」――誰もがそう強く感じ、二十世紀のスタンダードとは違った多様性に富んだ自由や幸福の形が求められています》（米田智彦［２０１３］「はじめに」）と述べている。このような時代認識は、前章で採り上げたグローバル化論者と変わるところはない。

米田が提示する「ノマド・トーキョー」は、《本来の「遊牧民」の意味に近い、定住所を持たない「ノマドライフ」》（米田前掲「はじめに」）と説明している。米田は《東京をまるごとシェアして旅するように暮らす》（米田前掲「はじめに」）という生き方をすることにより、新しい考え方を得ることができたという。

> この経験が僕の人生に新しい風を吹かせ、ルーティンな生活の中に埋没し、次第に新鮮さを失いかけていた東京という街に対するイメージをがらりと変えていきました。思い切って「所有」という固定観念を捨てたことで、それまで当たり前だと思っていた働き方や暮らし方に対する考え方が大きく変わっていったのです。（米田前掲「はじめに」）

このような《「所有」という固定観念を捨て》るという考え方が前面に出るのは、決して米田のオリジナルというわけではない。ただ米田に関して言うと、米田は同書のそれぞれの章で「セルフ」すなわち《自己の「多面性」のデザイン》、「ワーク」すなわち《「つながり」を生む働き方のデザイン》、そして「リビング」すなわち《「多拠点」の住環境のデザイン》について論じている（それぞれ米田前掲「はじめに」）。

米田の考え方の根幹をなすのは「シェア」という考え方である。そもそも米田は東京を旅しながら生きていこうとしたときに『シェア――〈共有〉からビジネスを生み出す新戦略』（ＮＨＫ出版）という書籍に出会い、以降住環境からモノに至るまで様々なものを「シェア」して生きていこうとするようになったようだ（米田前掲第１章）。

米田の「シェアライフ」を担保するのは主にソーシャルメディアとされている。米田はツイッターで《「家と家財を捨てて、東京を旅するプロジェクトを始めます」と一方的に宣言》（米田前掲第１章）したことに対して毎日反応があったということで、ソーシャルメディアを通じて「つながる」ことにより生き方を実践してきたとしている。

インターネット、ないしソーシャルメディアを担保とした「新しい生き方」を主張したものとしては、２０１２年半ば頃に話題になった、ｐｈａ『ニートの歩き方』（技術評論社、２０１２年）もこの流れに位置づけることができるだろう。ｐｈａはインターネットを使って、細かい仕事やシェアハウスの経営などをしているという。ｐｈａは同書の目的について、《働かなくてもそれほど後ろめたさを感じずに生きられるというのが本当に豊かな社会》（ｐｈａ［２０１２］ｐ．１３）というものが認められることを挙げている。

ｐｈａの言説においては、既存の「ニート」バッシングが、上の世代が形成してきた社会の「常識」に縛られていることから出てきているという認識を表明しており《自分が若かった頃の常識で世界を見てしまう上の世代は、全く違う状況に置かれている今の若者にも「頑張ればなんとかなる」「そうやってみんややってきたんだ」と言ってしまう。でも今と昔では状況が違う。昔の